



「地方創生」に翻弄されない、 地域の人々の声が響きあう 地域の取り組みを

田中 夏子

現在は、すっかり定着したかに見える政策用語「地方創生」。各自治体に対し、2015年度内に「人口ビジョン」「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定することが求められ、この1年間、各自治体では「ビジョン」と「戦略」作成に追われました。

一連の流れの発端となったのが、『中央公論』「特集 壊死する地方都市」（2013年6月）。「壊死」というショッキングな言葉で議論が提起され、2014年6月に増田寛也編著『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』が中公新書として単行本化されると同時に「地方創生」政策が本格化し、9月には「まち・ひと・しごと創生本部」の設置、12月には「まち・ひと・しごと創生法」が制定されるスピード展開となりました。

「人口減少歯止め」と「東京圏への過度の人口集中を是正」することを目的とする同法のもと、モデル的な政策メニューの提示も相次ぎます。例えばその典型、日本版CCRC (Continuing Care Retirement Community) 構想は、東京圏等の高齢者が「希望に応じ地方や『まちなか』に移り住み」「多世代交流」「アクティブな生活」「必要な医療・介護ケアを受けることができる」仕組みとして推奨されています（「内は官邸資料の言葉」）。しかし各地域で「健康な高齢者」の誘致を競えば、都市住民に対して、他地域よりも有利な条件を提示しあう地域の「安売り」合戦にならないか心配です。若年層の移住については、地域おこし協力隊の増員も創生メニューの一環に位置付けられています。さらには「地方居住の気運」を高める目的で2015年5月には「そうだ、地方で暮らそう！」国民会議まで設

置されました。同会は「地方居住の推進に向けて、産・官・学・金・労・言をはじめとする国民各層一体となった取組を推進し、国民的・社会的な気運を高めることを目的」とし、産業界はもとより、大学や労働組合、マスコミもその構成メンバーとして動員されています。

しかしそもそも人口の移動や家族形成のあり方を政策対象とすることには大きな矛盾があります。それを重々承知の上、市町村も対応してはいるのですが、いつしか「地方創生」という言葉が日常化する中で、思考も行動も方向付けられてしまう傾向になりはしないでしょうか。そうならないために国推奨の「モデル事業」に活路を見いだすより、そこに住む人、関わる人の生き方や言葉に依拠して、その地域の方向性を探り出すことが大切と感じています。

そんな思いを強めたのは、2月初旬、長野県阿智村を訪れた際のことでした。4年前に卒業したゼミ生のTさん（男性）が同村の中央公民館の仕事に携わっている関係で、私は、毎年2月上旬に開催される同村の社会教育研究集会にお邪魔しています。同研究集会は、「生活に深く関わる問題を明らかにし、話し合い、学習する場」として今年で49回目を迎える歴史ある集会。村民が実行委員会を構成し、企画はもとより、準備作業、当日運営を担います。阿智村は人口約6600人の村ですが、今年の研究集会への参加者は午前（全体会）・午後（7つの分科会）合わせて、のべ300人近くでした。力の入れようが伝わってきます。今年は「若者の視点から考える

～阿智村の暮らし、しごと、つながり」というテーマでシンポジウムを開催。そのコーディネートを務めつつ、改めて考えたことを記して巻頭に代えさせていただきます。

2日間で同村の若い世代8名からお話をうかがう機会がありましたが、彼ら・彼女らは、地域でどう暮らし、何を大切と思っているのか。ここではシンポジウムで一緒にした4名のお話からその一端を記します。

村内スキー場で早朝の降雪作業を終え、シンポジウムに駆けつけて登壇したKさん（男性）は、同村の出身。県外の大学卒業後、地元に戻り高校で非常勤教員をやりながら野球指導もこなしていましたが、就農を決心。2年間、村内の農業研修所で農業を本格的に学び、現在は自立して野菜栽培を営んでいます。実家が専業農家なので作業は小さい時から手伝ってきましたが、自分で一から十まで段取りをするようになると「見えてくるものが全く違う」とのこと。「ようやく、（地域の営みの）大きな流れの中に入ることができた」手応えを感じているといいます。

Yさん（男性）もやはり地元出身。県外の大学でスポーツに専念していましたが、肩を壊してスポーツは断念。このとき目指してきた進路が閉ざされ、気持ちが大きく動揺する中で、地元の仲間に支えられてなんとか方向転換できたといいます。地域のために何かしたい、そのために村のことをもっと知りたいという気持ちが高まり、在学中からしばしば郷里に戻っては公民館事業「あち未来塾」にも参加してきました。4月からは役場職員として働きます。

Mさん（女性）も地元出身。県外の大学で音楽の指導者になるための勉強をした後、地域住民が火薬から手作りし、奉納花火に至るまで一切を仕切る花火づくり（長野県の無形民族文化財に指定）に参加するため村に戻りました。仕事は、花火づくりの活動に支障がないよう、夜や土日を拘束されないものを選んだといいます。私などは、地域の伝統行事と聞くと、上下の序列が厳しい世界と思いますが、Mさんによれば、花火の仲間は、認め合う関係が成立していて、その不思議な関係が魅力といいます。

Nさん（女性）は、首都圏から阿智に入りました。大学卒業後、タイの山岳民族のもとで生活した体験がきっかけとなって、「お金に頼らず、自分の力で必要なモノを生み出す生き方」に圧倒され、地域おこ

し協力隊として同村に着任。現在、種取りをしながら伝統野菜保存に取り組む地域の人々の活動に飛び込んで、耕作・販売普及に携わっています。

こうして見てくると、若い人が地域に入る経路は、きわめて多様です。「雇用」が用意されるから戻るわけではありません。住居や各種の優遇制度があるからでもないようです。同村の定住促進政策はきめ細やかで独自色強いものですが、それでも、そこで生きようと決め、また現に暮らしている若い人々は、政策に誘導されて地域に入るのではなく、それぞれの人生航路の中で、独自の必然性に導かれてここに立っている…お話からは、そんな気迫が伝わってきました。

おそらく、こうして農山村にひきよせられる人々は、移住や定住が政策化されたり「国民会議」と称して多方面から鼓舞された途端、そのことに居心地のわるさを感じるのではないのでしょうか。なぜなら、自分の生き方を地域の取り組みにつなぎつつ、時間をかけて地域での役割を編み出していく彼ら・彼女らの手法と、人を頭数でとらえるような移住政策は、ベクトルが全く逆だからです。

阿智村には満蒙開拓記念館（2013年4月開館）があります。阿智村の存する長野県南部は、日本の中でも最も多くの開拓団を送り出した地域。この博物館では、開拓移民という国策に翻弄され、多くの被害と同時に加害をも生み出した歴史的事実が、質・量ともに圧倒的な証言によって語り継がれています。国が人口政策に動くとき、地域はどのような判断基準をもって、地域住民とその暮らしを守り抜くのか、阿智村は、そのことを鋭く問いかける空間でもありました。

（都留文科大学等非常勤講師）